

SUSTAINABLE
DEVELOPMENT
GOALS



令和 7 年 (2025) 度

郡山市おもいやり作文コンクール

優秀作品集



郡 山 市

もくじ

■作品 ※公表に同意いただいた作品のみ原文を掲載しています。また、最優秀賞・優秀賞のみ講評を掲載します。

【最優秀賞】

小学生の部 私の右耳が教えてくれたこと
中学生の部 「知」が生む優しい社会

郡山市立橘小学校
郡山市立郡山第五中学校

【優秀賞】

小学生の部 車いすのけいけんから見えた景色
発達障がいのことを知つて
初めての気づき
あなたならどうする?
「こうき、虫捕り行こう。」
違いをこえて、共に生きる
ほんの少しだ支えが、大きな力に

郡山市立行徳小学校
郡山市立明健小学校
郡山市立大島小学校
郡山市立郡山第三中学校
郡山市立郡山第三中学校
郡山市立郡山第五中学校
郡山市立郡山第五中学校

四年 五十嵐 美奏
五年 鎌田 偉成
四年 佐久間 莉子
五年 黒田 芽生
四年 寺木 誠容
五年 四方田 真桜
二年 森田 昊希
三年 渡部 賢信
二年 五十嵐 朱璃
一年 一稀

【佳作】

小学生の部 点字ブロックについて
障がいの方との関わりや体験で感じたこと
理解することの大切さ
弟たちがおしえてくれたこと

郡山市立高瀬小学校
郡山市立富田東小学校
郡山市立金透小学校
郡山市立富田中学校

五年 五年 五年 五年
六年 五年 五年 五年
伊藤 遠藤 石附 吉田
瑞葵 花珠 朝陽 一稀
・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・
34 32 30 28
24 22 20 18
16 14 12
8 6

弟が教えてくれる幸せ——
吃音と私——
「自分と違う」を認められる人になる——
一つの言葉で思いやりのあるふれるまちへ——
バリアフリーについて——
誰もが輝けるまちを目指して——
障がい者について——

郡山市立喜久田中学校
郡山市立喜久田中学校
郡山市立郡山第五中学校
郡山市立郡山第五中学校
郡山市立郡山第五中学校
郡山市立郡山第五中学校
郡山市立郡山第五中学校

三年 三年 三年 三年 一年 三年 三年

根本 木幡 今井 千葉 井上 佐藤 遠藤
晴空 陽斗 皐月 優奈 優奈 うらら 結真
・ ・ ・ ・ ・ ・ ・

48 46 44 42 40 38 36

52 50

【最優秀賞】



私の右耳が教えてくれたこと

郡山市立櫛小学校 四年 五十嵐 美奏

私は生まれつき右耳が聴こえません。生まれてすぐのスクリーニング検査で聞こえていない事が分かつたとお母さんから聞きました。その後の検査で右耳はジェット機の大きな音も聞こえないことが分かりました。でも、私の耳は聞こえています。お母さんの声も先生の声もお友達の声も聞こえてます。だけど、たまに聞こえていなかつたのかなと感じる事があります。周りがさわがしかつたりすると肩をたたかれるまで気付かなかつたり、遠くからお母さんが呼んでいても気付かずいつも周りのお友達が

つていました。だからお姉ちゃんにないしょ話をするとときはいつも「これ聞こえる方の耳?」と確認していました。ある日、同じように聞いた時に「普通は両方とも聞こえるんだよ。」

と言われてとてもおどろきました。両方、聞こえるってどんな感じかなと思いました。

小学校に入学する時、お母さんから

「もしかしたら、どうしてむしするの?」とおこひで言つてくれ人がいるかもしれない。でももしそう言われてもおこつて言いかえすんじゃなくて、右耳が聞こえないから左側から話しかけてねと言いなさい。」

と言われました。でも入学してから四年間周りの友達はいつもやさしく教えてくれます。この作文を書いていてもしかしたら友達の呼びかけに気付かない事もあったのかなと思いま

「呼んでいるよ。」
と教えてくれます。特に、マスクをついている人や男の人の低い声は聞こえにくかったりします。そういう時はお母さんの方を見ると何といったか教えてくれます。

小さいころは周りのみんなも右耳は聞こえていないと思

いです。お母さんは「お母さんも聞こえますよ」とお母さんの方を見ると何といったか教えてくれます。

ました。でも、だれにもおじいちゃんを言われた事がないので友達のやさしさだったのかなと思いました。そう考えると、私が気付くように肩をたたいてくれたり、呼んでいるのを教えてくれるのは友達の優しさだったんだなと気が付きました。

私の周りのやさしさについて考えてみました。クラスメイトが物を落とした時に拾ってあげたり、お母さんが荷物をたくさん持っていたら手伝います。今まであまり考えず当たり前にやっていたけど、

「ありがとう。」

と言われると私もうれしい気持ちになります。何かをしてもらったり、してあげたりするのもやさしさだけどありがとうと言ひ言葉もやさしさだと感じました。小さなやさしさがたくさん集まればやさしい気持ちが集まって大きな幸せになるんじゃないかなと思いました。わたしもありがとうということを忘れずに周りの人にもうつたやさしさをお返しをできる人になりたいです。

【最優秀作品 講評】

自分自身が抱える障がいのことを主題にし、前向きな気持ちが書かれています。経験を通して周囲の温かさが描かれるとともに、周囲から受けた優しさを素直に受け取り感謝が述べられています。「やさしさ」について考えさせられ、自身がもった優しさをお返しのできる人になりたいという思いが伝わる心温まる作品です。

「知」が生む優しい社会

郡山市立第五中学校 一年 鎌田 倖成

障がい者といつて、皆さんはどんな人を想像するだろうか。僕には、発達障がいという障がいを持つ叔母がいる。発達障がいと言つても皆が全て同じではなく、人によつて様々な特性や個性がある。僕の叔母はコミュニケーションや感情のコントロールに難がある。そのため、空氣を読むことが特に苦手で、感情の起伏が激しい。体は大人だが、心は子どもなのだ。

僕が小さかった頃は、僕の心も幼かったため、同年代の友達のように遊んでくれて、とても楽しかった思い出がある。もちろん、叔母の障がいについては気付いてすらいなかつた。だが、自分が成長するにつれて、叔母が障がいを持つていることにだんだんと気が付いてきた。叔母の持つている発達障がいに気付いた経験が二つある。

一つ目は、祖父母と会話していた時のことだ。僕が最近あつた出来事などについて話していると、叔母が突然全く関係ない話で割つて入つてきた。僕は驚き、言葉を返すことがで

きなかつた。祖父母はうなずきながら話を聞き、さりげなく僕の話に話題を戻してくれた。しかし今思つと、叔母に悪気は一切なかつたのだ。

二つ目は、叔母が泣いていた時だ。泣いているのかと思つたら、突然叔母がふざけ始めたことがある。僕は、悲しさで泣いていたはずの叔母がふざけている姿を見て、変だなとすら思つてしまつた。その後、急に感情が大きく変化することがある障がいだと大人から聞いて、そうだったのかと納得し、叔母は変だと思った自分が恥ずかしくなつた。もしかすると、心配させまいと明るく振舞ってくれていたのかもしれない。

そんな発達障がいをもつ叔母だが、出来ることも多くある。交通量の少ない道での自動車の運転や簡単な家事などだ。しかし、今まで効率良くできないことや失敗してしまつことも多々あつた。そのような時、周りにいる人がアドバイスしたり、見守つたりしている姿を見て、サポートが大切なのだと実感した。

周りが気が付きやすい身体障がいなどの障がいは目に見えるため、周りの人も配慮しやすい。しかし、叔母の発達障がいのように、周りが気付きにくい障がいもある。僕は親族だから叔母の障がいについて知っているが、周りから見ると叔母は「浮いた存在」という風に見られてしまうこともあるだろう。実際のところ、僕も障がいについて知るまでは、叔母のことを変わった人だと思っていた。

障がい者と一口に言つても、周囲の人が気が付きやすい障がいを持った人から、コミュニケーションを取らないと分からぬ障がいを持つ人までいる。また、自分の障がいのことを見渡せる人と説明することが難しい人がいる。

このように、障がい者でも様々なのだ。その人たちと良い関係を築くために必要なことは、距離を取らず少しづつ自分から歩み寄ってみることだと思う。なぜなら、自分が障がいを持つている人を知ろうとすることによって、その人のことを思いやって行動することができるからだ。もちろん相手がそれを望んでいる場合に限って、ではあるが。僕自身、叔母の障がいがどのようなものか知つてからは、叔母に会った時に良好な関係を維持できるようになつた。

しかし、今も障がいについて分かつてもらはず、生き辛さを抱えている人はたくさんいるだろう。障がいの有無にかかわらず、皆がお互いの違いを個性として認め合える、優しさ

に包まれた社会になつていつて欲しいと願つてゐる。僕も障がいをもつてゐる人にに対する理解を深める努力を続けていく。誰もが幸せで、生きやすい社会に少しでも近づけるために。

【最優秀作品 講評】

身近に障がいをもつ方がいたことで、「障がい者」についての理解を深めました。そのことで、偏見があつた自分を振り返り、「知らうとする」と「大切さに気づきました。そして「お互いの違いを認めあえる社会」を願う、中学生として等身大の思いを、素直につづつてゐる点が読み手の心に真っすぐに伝わる作品だと感じました。

【 優秀賞 】



車いすのけいけんから見た景色

郡山市立行徳小学校 四年 佐久間 莉子

全国には、車いすを使っている人が一百万人いると聞かれています。病気やケガで車いすを使っている人、年をとっても歩けなくなつて車いすを使っている高齢者などいろいろな人がいます。

わたしも小学一年生の時、病気をして、しばらくの間車いすを使っていました。運動をしてはいけなかつた

ので、家の中と学校の校舎の中以外は車いすでの生活でした。今は病気もなおつて自分で歩くし運動だつてできます。ダンスも習つていてたくさん体を動かしています。でも、病気をしていた時は自分で車いすを動かすことができなくて、いつもお父さんやお母さんがおしてくれていました。お母さんに、わたしが車いすを使っていた時に大へんだったことは何か聞いたら、「車いすが通ることができないせまいところは大へんだった」と言つていました。「地面がでこぼこになっているところも車いすをおすことがむずかしかった」と話していました。

今は、高齢者や体などがふ自由な人にとってじゃまなものをとりのぞいて生活しやすくなる「バリアフリー」がすすめられていると聞きました。車いすを使う人にとってのじやまなものは、お母さんが言つていたよだんさやせまいところだと思います。

わたしは、今年の夏休みに家族旅行で行った東京で、バリアフリーになつているところはどこかさがしてみました。駅やお店がたくさん入つていねじるなどいろいろなところに行きましたが、階段のとなりにスロープが作られている場所があちこちにあって、車いすの人も通れるようになつてしました。郡山よりも東京の方が車いすの人は多かったです。でも、車いすの人はするりとわたしの横を通りぬけていて、ちゃんとバリアフリーになつてているんだなと思いました。スロープには車いすの人だけでなく、ベビーカーをしている人や高齢者、小さな子どもをつれている人などいろいろな人がいました。また、電車に乗つたときにざ席のない広い場

所がありました。車いすやベビーカーのためのスペースで、だれでも、電車を利用できるように工夫されました。車いすの人にとって、車いすが便利なことは、他の人にとっても良いことなんだなと感じました。

それで思い出したのが車いすを使って、行った水族館です。車いすがスムーズに通れるところが多くて、こまるることはありました。家族みんなでかっこいいイルカのショーも見ることができ、楽しかった思い出があります。調べてみると、その水族館には、車いすやベビーカーを利用している人のための地図があつて、スロープやエレベーターの場所、自動ドアのはばまで、書いてありました。そのおかげでみんなで、安心して楽しめました。

いつも生活している場所にも、この水族館のように使いやすい地図があると、みんなが安心してすこせると思います。そして、使う人の気持ちになつて考えること、とても大事だと思います。わたしも車いすを使ったことがあつたから、じゃまなものは何かなどいろいろ考えることができました。学校や会社でも車いすの体験会をするなどして、だれもが使いやすい場所になるようにみんなで考えて、いいなと思いました。

わたしのおじいちゃんやおばあちゃんも、もうと年を取つ

たら車いすを使うようになるかもしません。すぐに道路やお店などをバリアフリーに作り直すことはむずかしいと思いますが、わたしも、こまつている人がいたら声をかけたり、車いすの人や高齢者にとって、じゃまなものがあれば、まりの人に伝えたりとできるから、始めたいと思いました。そして、あたたかい社会を作るやさしい人になれれば良いなと思いました。

【講評】

自身の経験から課題を見つけ行動し、考えをまとめていくというプロセスがよく表現されています。障がいを持つ人にとって、今の社会状況がどうなのかを考え、小学生らしい視点からバリアフリーについて自分の考えを述べるなど具体的な提案がされています。

発達障がいのことについて

郡山市立明健小学校 五年 黒田 莜生

私は、発達障がいのことをもっと知りたいと思いました。

なぜなら、父が発達障がいのある友達の家に行つて、話を聞いたり、一緒に過ごしたりする、看護師をしているからです。

私は、その話を聞くたびに、「どんな子たちなんだろう。どんなことで困っているのかな。」と思うようになりました。

初めて「発達障がい」という言葉を聞いた時、私はそれがどうしたことなのかよく分かりませんでした。しかし、父に聞いてみると「周りの人と少しちがう感じ方をする子がいるんだよ。うまく気持ちを伝えられなかつたり、周りの家庭環境にとてもびん感だつたりするんだよ。」

と教えてくれました。

私はその話を聞いて、「人とちがう」とは悪いことではない。と思いました。人それぞれちがうのは当たり前で、一人ひとりに考え方ややり方、感じ方があるのだと思います。

でも、周りの人によく分かつてもらえなかつたり、学校でつらじ思いをしたりすることがあると聞いて、私は悲しく

なりました。

例えば、私たちが当たり前にしていることでも、その子にとってはむずかしいことかもしれません。

父が担当している子で、同じ順番でないと気がすまない子がいるそうです。道具やおもちゃなど、その子の並べ方や、入れ方があるようで、少しでもちがうと怒ってしまい、周りがびっくりすることがあるようです。最初は「何でこんなこと？」と思いましたが、父から

「その子にとつては、とても大切なことなんだよ。だから、それを理解して、受け入れることが大切なんだ。」

と教えてもらいました。

また、他の子は、じっと座つていふことがとても苦手で、じゅ業中に急に立ち上がつたり、大きな声で話してしまったりすることがあるそうです。でも、その子は、悪気があるわけではなく、自分でもコントロールがむずかしいということを知りました。そうしたことを知つてから、私はその子たち

の気持ちを少しずつ考え方になりました。

私の学校にも不思議な行動をとる子や、言葉の出でひい子がいます。

「ひっしょに遊び。」

と声をかけたり、話をしたりするといふおしゃべりに笑うので、私もうれしくなりました。

私はこれからも、発達障がいのことをもっと知っていきたいです。そして、いろいろな子と友達になれるように、相手の気持ちを考えて行動できるようになりたいです。発達障がいが、あってもなくても、みんながすこしやすい学校や町になつたらいいなと思います。私も、そんな社会にできるように、私ができることを、これからも考えていただきたいです。

【講評】

発達障害とこう特性について知ったことで、その子たちの気持ちを少しずつ考えられるようになり、そのことから学校でもいろいろな子と積極的に交流したいという思いがよくまじめられています。

初めての『氣づき

郡山市立大島小学校 四年 寺木 誠容

ぼくはある日、夕食の時間にソースの容器に小さな点々があることに気がつきました。

「なあにこれ」

とお母さんに聞いてみたら、

「それは点字だよ」

と、教えてくれました。点字というのは、田の見えない人も分かるようにする工夫だと知りました。

そこでぼくは他にも田の見えない人のための工夫があるかを調べてみました。そうしたら、点字ブロックや、お金についている点字の工夫もありました。そのうちぼくも田の見えない人のための工夫にきょうみを持ち始めました。

そんな時にお母さんが話をしてくれました。うねめ通りという大通りを歩いている時、田の見えない人に会ったそうです。その人はもうどう犬をつれて、白いつえをついて歩いていました。道を行ったり来たりして、まよっている様子でした。お母さんが声をかけてみると、バストイガ見つからなく

てこまっていたそうです。

ぼくは色々なことを思って、家族で話しました。例えば大通りで道が広いから、バスていが見つかりづらかったのかなとか、人通りが少ないから、道を聞ける人や声をかける人がいなくてこまっていたのかなとか、色々なぎ問に思ふことを話しました。お母さんもさい初はもうどう犬もつれているので、おどろかせてしまふかも知れないし、気軽に声をかけるのか、まよつていたそうです。点字ブロックやもうどう犬がいてもこまるこまることつてあるんだなと思いました。

ぼくの住んでる地じきはいなかなので、車でい動することが多いから人通りが少ないです。そもそも声をかけたり聞いたりする人がいないと、その人はずっとまよつたままです。ぼくだったらこの時どうするか考えました。お母さんといっしょで、少し様子を見てゆう氣を出して声をかけると思います。やっぱりこまつている人を助けたいからです。

そして、こんな工夫をしてみたらどうかなと思いました。

例えば、バスでいに人が通つたら、音が出て場所を知らせるようにする。もうどう犬に分かるとくべつなにおいをつける。つえにGPSをつけて行きたい場所に着いたらつえがふるえて教えてくれるようになる。こんな事をたくさん考えてみました。

でも、今の自分ではそういうことが一人では出来ません。どうしたら出来るか分かりません。いつかは出来るようになります。だから今自分ができる事をやりたいです。目の見えない人がいてこまついたら、お母さんのように声をかけて、話を聞いたりしたいです。また、目の見えない人にとつてきけんな場所がないか注意してみたいです。周りの人にも伝えたりしたいです。勉強もたくさんして、今の気持ちもわすれないで大人になっていきたいです。

【講評】

点字の存在に気付き、調べて、家族と話したことで考えを深めました。また、経験する中で感じたことが詳しく書かれ、考えたことがよく伝わってきます。

あなたならどうする？

いつものようにインターネットを見ていたとき、田に留まる動画がありました。それは、子どもと大人が画面に写し出されている人の表情を真似するという動画でした。動画を見進めていくと、子どもも大人も変顔など色々な表情を楽しんでいる様子で真似をしていましたが、大人の人だけある映像で真似をするのをやめる場面がありました。その映像は障がいのある人が変顔をするというものでした。健常者が変顔をしているときは子どもと一緒に真似をしていたのに、なぜ障

がいのある人のときだけ固まってしまったのがとても気になりました。そこで、子どもと大人両方の視点になって、なぜこのような結果になったのか考えてみることにしました。

まず、子どもの場合、私が小学校低学年のころを思い出してみると、障がいを持っている人と持っていない人に違いがあると深く考えることがなかったように思います。従つて、動画内の子どもたちも、画面の中の変顔をしている人がたど

え障がいのある人だからといってなにも思わず純粹に真似をしたのではないでしょうか。

次に大人の場合、障がいのある人との関わり方について学ぶことや、実際に障がいのある人と接することが増えてきます。その経験から、障がいのある人たちと自分たちとの違いを考えすぎてしまうのではないかと思います。そのため、動画の大人们たちは、障がいのある人の真似をすることに抵抗を覚えてしまったのではないかでしょうか。

そこで、子どもの場合と大人の場合の一通りの考え方をふまえて、障がいのある人にとって思いやりのある行動とはどのようなものなのか考えました。子どもの純粋な心で障がいのある人を特別視しないところ、大人の障がいのある人への理解度が高いところがそれぞれの一番の思いやりのある行動だと感じました。一方で、大人の理解の中に「かわいそう。」などの言葉も入っているのではないかと思いました。「かわいそう。」と思つことも決して悪いことではないのですが、

郡山市立第二中学校 一年 四方田 真桜

障がいのある人にとって障がいは特別なものではないと思うので、その意識が強すぎるのも偏見につながりかねないのかなと思いました。しかし、大人の障がいへの理解は、困っているときに声をかけたり手助けができる優しさへもつながります。

子どもの純粋な特別視をしない面と、大人の障がいへの理解から自然と生まれる優しさの一いつの面が一つになつたときには、素晴らしい思いやりの気持ちと行動になつていいくのではないかと思います。

しかしながら、大人になるにつれて障がいのある人への偏見を持つてしまう人も決して少なくないと思います。自分と違うことを理解するにつれてマイナスの考え方の人それぞれ出てくると思います。このような人を少しでも減らすために、今持っているマイナスの感情をプラスにすることが大切だと思います。私のように、インターネットを通じて知った映像から、障がいについて考えることもそのひとつの中段であると思います。無知がゆえに傷つけてしまうこともあります。理解しているがゆえに偏見を持つこともあります。そんな中、現代はたくさん情報があふれています。その情報から考え、話し合うことによりプラスの感情への変換が可能となるのではないかでしょうか。

私は純粋な心と優しい手を持つようになりたいです。

【講評】

障がいのある方に対し、大人と子供の視点で考え、それぞれのプラス面を合わせ「純粋な心と優しい手」と表現し、それをもち合わせることを理想としたところがとても素晴らしいと思い感心させられました。

「ハハモ、虫捕つに行ひへ。」

郡山市立第三中学校 一年 森田 瞳希

横浜から遊びに来た、小五のことじに何度も言われて、これいつ終わると絶望感。他のことで『仮がそれで、終わったかと思うとまた始まる。虫捕りも今日だけで四回は行った。外は暑いし、僕は虫が嫌いだ。

母に聞いた話だと、いとこは、自閉症スペクトラムとADHDで実年齢よりも三才位下なんだとか。あいまい、社交辞令、相手の声のトーンや表情を感じるのが苦手みたいだ。

幼い頃から、年に一、二回しか会わないけど、いとこはぼくの事をすごく好きらしい。ぼく達の祖母のお葬式の時は、

ぼくの側にいたいと騒いで大変だった。水族館に行った時は、中に入りたくないと騒いで、ぼくまで入口で一緒に入れるまで待った。スキー場に行った時は、スノボやりたいのに永遠にそり滑りにつき合った。そして、毎年夏休み恒例の虫捕りだ。

何で年に一、二回しか会わないのに、こんなに仲が良いかといふと、じつは年が近くて男はぼく達しかいないからだ。

いとこにとってもぼくにとっても、いつも時に遊べる唯一の存在だ。

毎回会う度に、面倒くさいと懶らうとは多いけど、いつもぼくには二コ二コついてて、ぼくと過ごす時間を楽しみにしてくれている。そういうのは、めんく嬉しう。いとこは、ぼくにフィルターをかけないで真っすぐ見て、うそもつかずにぶつかってくる。だから、ぼくもいとこの前で無理に笑ったり、無理して、氣をつかつたりしない。ぼくもいとこには、真っすぐ向き合つてう。

つまり、嫌いな虫捕りも面倒に思つうともううの楽しそうな顔が見たくて、ぼくが選択して、行動してうのだ。自分の苦手なものよりも、いとこの笑顔が好きなんぼくは、いとこがすごく好きなんだろう。

嵐のような、お盆休みが終わった。次は、お正月に来て、またそり滑りに行くという話だ。正直つらいがいとの笑顔がぼくは、大好きだ。だからつらうなんていう感情をなくし

て、ごとに迷つゝ遊ぼうと思つ。まだ、やつたかつたスノボが出来なつと思つが、氣にしないでいいと思つ。

【講評】

障がいのあるごとに、互いにフィルターをかけないで真っすぐ向き合つてゐる関係が、素直な言葉で表現されていて微笑ましくなりました。文章の書き方にも工夫を凝らしてお読みやすい作品でした。

違いをこえて、共に生きる

郡山市立第五中学校 三年 渡部 賢信

私の周りには、障がいのある人はいません。学校の特別支援支援学級の生徒を見たことはありますが、実際に深くかかわったり、一緒に活動をしたりする機会はほとんどありませんでした。しかし、日本では人口の約九・二パーセントが障がいを持って生活しているそうです。十一人に一人の割合です。そう考えると、日常の中で街を見かけたり、接したりする機会がもっとあってよいはずです。けれども、私には経験がなく、知的障がい者や精神障がいなど外見から分からぬ障がいも多いのだと感じます。実際には、障がいのある人が外に出にくい環境や社会的な壁が残っているのかもしれません。それでは「共に生きる社会」とは言えないのではないでしょか。

私は中学二年の時、障がい者福祉施設を訪問しました。そこでは寝起きりで生活する人がいたり、メガネを見ると興奮してしまうため「外してください」と職員に言われたりしました。交流の時間もありましたが、どう接してよいか分から

ず困惑いました。正直、「きいちなく過ごすしかありませんでした。普段の学校生活では想像できない場面ばかりで、ただ驚いているうちに時間が過ぎてしまった感じでした。ですが、その体験を通して「自分の知らない世界がある」と強く実感しました。もしも、小さじころから障がいのある人と自然に接する経験を積んでいれば、もっと自然に声をかけられたのではと思います。

現在、福島県では「障がいのある人も共に暮らしがやすい県づくり条例」が定められています。不当な差別をなくし、必要な合理的配慮を事業所に義務づける内容です。意義ある取り組みですが、本当に大切なのは一人ひとりの意識や行動が変わることです。制度が整っても、私たちの心の壁が残れば社会は変わりません。だからこそ、子どものころから障がいのある人と一緒に過ごす環境を整えることが必要だと思います。

私のように身近に障がいのある人がいないと、社会で出会

つたときにどう対処してよいか分からず戸惑います。だからこそ、子どものころから一緒に授業を受けたり、行事を共にしたりする経験が大切です。その経験を通じて「障がいがあるから特別」ではなく「同じ仲間」として自然に接する心を育てられると思います。

この点で、私は「インクルーシブ教育」をもっと広げるべきだと考えます。インクルーシブ教育とは、障がいの有無や国籍、人種、宗教、性別に関係なく、全ての子どもが同じ場で学ぶ教育です。多様性を尊重し、教育を受ける権利を保障するとともに、互いの違いを理解できるようになります。北欧では障がいのある子どもとなり子どもが共に学ぶ環境が整い、社会全体で自然に理解が育つといいます。日本でも少しずつ導入されていますが、まだ十分ではありません。特別支援学級と普通学級が分かれている現状では、交流が分かれている現状では、交流が限られてしまふからです。行事や活動を一部でも一緒にを行うなど、できるところから始める必要があると思います。

小さいころから共に過ごせば、「どう接してよいか分からぬ」という壁はなくなるはずです。そして障がいを一つの個性として受け入れ、対等に関わるようになるでしょう。障がいがあつてもなくても、誰もが自分らしく生きられる社会こそが本当に豊かな社会だと思います。

障がい者と共に生きる社会とは、すべての人人が楽しく笑顔で過ごせる社会です。その実現には理解しようとする姿勢と、対話やコミュニケーションが欠かせません。私は将来、社会の中で障がいのある人に会った時、戸惑うのではなく自然に声をかけ、共に活動できる自分でありたいと思います。そのために、今から少しずつ意識を変え、理解を深めていきます。私たち一人ひとりが学び、考え、行動することが、社会全体を変える第一歩になるのだと信じています。

【講評】

障がい者を取りまく状況についてたくさん知識をもつていて感心しました。体験が少ないことで意識が十分でないことを省みて、自分ができることを、少しずつ行動にしようとする熱意が伝わりました。

ほんの少しだ支えが、大きな力に

私たちが日々の生活を送る中で、「思いやり」という言葉は、しばしば暖かい響きとともに語られます。しかし、その真の奥行きをどれほど的人が理解してくれていいのでしょうか。特に、障害を持つ人々との関わりにおいて、思いやりは単なる親切心を超えて、私たち自身の認識や社会のあり方を問い直すより深い意味を持つことだと思います。

まず私たちは、日常生活の中で「障害」という言葉を耳にする機会は多いと思います。しかし、実際に障害を持つ人と深く関わる機会は、意外と少ないと思います。その結果テレビやインターネットで得た情報、あるいは漠然としたイメージだけで、障害を持つ人々のことを理解したつもりになつてゐるかもしれません。しかし、障害は一人一人異なり、その人の個性や生き方に深く関わっています。例えば、視覚に障害がある人の場合、全く見えない人もいれば、ぼんやりと光を感じる人もいます。聴覚に障害がある人も、手話を使う人もいれば、補聴器を使って会話をする人だっています。画一

的な「障害者像」で捉えるのではなく、一人一人の違いを理解し、尊重することが大切だと思います。では、私たちには具体的に何ができるだろうか。

まず、「知ること」です。障害に関する正しい知識を身につけ、彼らがどのような困難に直面し、どのように工夫して生活しているのかを知ることです。学校の授業やボランティア活動を通して、実際に障害を持つ人々と交流する機会を積極的に作ることも大切だと思います。また、私自身も生活していく中で、点字ブロックの役割や、声かけの仕方など、これまで知らなかつた多くのことを学ぶことができました。そして何より、彼らが私たちと何も変わらない喜びや悲しみを感じ、夢や希望を持っていることに気づかされました。

次に、「行動すること」です。街中で困っている人を見かけたら、勇気を出して声をかけてみるのも大切だと思います。例えば、「何かお手伝いできることはありますか?」という一言が、彼らにとって、大きな安心に繋がるかもしれません。

郡山市立第五中学校 一年 五十嵐 朱璃

もし、手助けが不要であればその意思を尊重することも大切です。また、公共の場でのマナーも重要です。一つ例を挙げ

ると、点字ブロックの上に物は置かない、車椅子スペースを空けておくなど、ほんの少しの配慮が、彼らの大きな助けになると思います。これは、特別なことではなく、誰もが気持ちよく過ごせるようにするための、いへ当たり前の行動です。

そして、最も重要なのは「共に生きる」という意識を持つことです。障害を持つ人々を「助けてあげる対象」として一方的に見るのはなく、社会と共に創りあげていく「対等パートナー」として捉えること。彼らの声に耳を傾け、彼らの意見を尊重し、社会のあらゆる場面で、彼らが活躍できる場を共に考えていくことです。例えば、手話通訳が必要なときにサポートするなど、私たちにできる「共に生きる」ための行動です。

私たちの社会は、まだまだ完璧ではありません。しかし、私たち一人一人が、「思いやりの心」「知る努力」をし、そして「行動する勇気」を持つことで、より良い方向へと確実に進んでいけるはずです。そして、多様な個性を認め合い、誰もが自分らしく輝ける社会。それは、障害を持つ人々ではなく私たち自身の未来を豊かにする、真の共生社会の姿だと信じています。また、私自身もこれからもっと視野を広げ、もっと障害を持つ人々のことを知つてもうかるように努めたいです。

【講評】
構成や表現が丁寧であり工夫されていて、とても読みやすく、思いがよく伝わる文章だと感じました。自分たちができるとして「知ること」「行動する」と具体的にポイントを示したところも分かりやすいと思いました。

【佳作】



点字ブロックについて

郡山市立高瀬小学校 五年 吉田 一稀

ぼくの身の回りには、点字ブロックがあります。ぼくがよく行く、ヨークベニマルや、ダイユーニイトにも点字ブロックを、みかけます。

でもぼくの日常生活の中では、点字ブロックを使う事は、まったくありません。

ある時、ぼくは点字ブロックについて興味を持ちました。駅で白い棒を持って、点字ブロックを「トントントントン」とやって歩いている人を見かけました。

ぼくが初めて「点字ブロック」という言葉を知ったのは、小学校の低学年のときでした。黄色いタイルのようなものが駅や歩道にしかれていて、田の不自由な人が歩くときの手助けになると聞いたことがあります。けれど、そのときのぼくは「そんな人、あまり見かけないし、自分には関係ない」と思っていました。

点字ブロックは、視覚に障害がある人にとって通じるべとなる大切なサインです。何気ない黄色い線が、実は命を守るやくわりをはたしてることを、ぼくはそのとき初めて実感しました。それ以来、駅のホームや交差点で点字ブロックの上には立たないよう意識するようになりました。

思いやりとは、だれかが困っているときに手を差しのべることだと思っていました。でも今は、それだけでは足りないと思うようになりました。だれかが「困る前に」気づいて、行動することが、本当の思いやりではないでしょうか。田の

家族で出かける時、駅を使うときにぼくはあることに気がつきました。出かけたとき、多くの人が点字ブロックの上に

不自由な人が不安を感じずに歩けるようにおるには、ぼくたち一人ひとりが「ここに立たない」「ふさがない」という意識を持つことが大切だと思います。

点字ブロックは、ただの黄色い道ではありません。それは、見えない人にとっての見える道なのです。その道がふさがれていたら、どれだけ不安でしょう。ぼくたちはあたりまえのように田を使って歩いていているけれど、田が見えない世界を想像してみると、そのこわさや不自由さが少しわかります。だからこそ、見えぬぼくたちがはいりよすることが必要だと思います。

この社会には、さまざま人がいます。体が不自由な人、年をとった人、小さな子ども連れのお母さんやお父さん。自分とはちがう立場の人ことを考えて行動することが優しい社会につながっていくと思います。点字ブロックを守るという小さな思いやりも、その一つです。

ぼくは、これからも、点字ブロックの上には立たないようになしようと思いました。そして、周りの人にも伝えていきたいと思いました。思いやりは、特別なことではありません。毎日の内で少しだけ周りを見ること、気づくこと、そして行動すること。それが、だれかの支えになります。そう信じて、ぼくはこれから行動し続けたいと思います。

障がいの方との関わりや体験で感じたこと

郡山市富田東小学校 五年 石附 朝陽

僕は、夏休み中に、お母さんの仕事場に行く機会がありました。お母さんの仕事場は、発達障がいの子供たちを支援する所です。発達障がいとは、どんなものか、調べました。

生まれつき脳の発達にかたよりがあり、すぐす環境や周りの人との関わりが苦手なことから、社会生活がむずかしくなる障がいのことです。大きく分けて三つに分けられます。一つ目はじへいしようです。じへいしようとは、他の人の気持ちを理解することや会話することがむずかしいのが特ちようです。二つ目は注意けつかんたどりしようです。これは、話を集中して聞けなかつたり順番をまてないなどのとくせいがあります。三つ目は、学習障がいです。これは読むことや書くことがむずしかつたり、計算することがむずかしいです。お母さんの仕事場には、じへいした障がいの子どもたちが通っています。そこで発達のじょうたいや障がいに合わせて、勉強したり言葉の先生がいて言葉を教えたりしています。また一日十人くらいの子どもたちが通つてくるので他の子と

の関りなどを遊びをとおして学んでいます。僕のお母さんは、かんこしなのでケアが必要な子どもの世話をしています。

夏休みの間、お母さんの仕事場に行き発達障がいの子どもたちと関わってみて、見た目は、普通の子でも関わってみないと分からぬこともあったしその子がどうこうことをしてほしいのか、やってみたいのか分かりました。じへいしようの子は、話すことができなくとも手を広げてだっこしてほしそうにしたり、遊びたいおもちゃの所に手を引っ張ってつれていくれたりなど、行動で自分のやりたいことを伝えてくれました。注意けつかんたどりしようの子は、部屋の中を走り回つていていすに座つている時間は、ほとんどありませんでした。しかし、ブロックなど自分の好きな遊びの時は集中してずっと同じ遊びをしていました。

お昼ご飯の時には、決まった物しか食べない子やじつと座つて食べない子もいて先生たちが集中して食べられるように環境を工夫したりがんばって全部食べられるようにはげ

ますこえかけをしていました。障がいといつても一人一人全く違うため、その子に合わせた関わりが大切だと思いました。僕の小学校にも支えんクラスがあります。今までは、支えんクラスの子たちを特別な目で見ていましたが、今回の経験を通して特別ではなく同じ社会で生活していく仲間として思いやりを持つて接していきたいと思いました。また周りの友達にも伝えて多くの人がしそうがいのある人のことを知つて、思いやりを持つて生活できるようになればいいなと思います。

理解することの大切さ

郡山市立金透小学校 六年 遠藤 花珠

みなさんの身の周りには障がいを持った「障がい者」の方は、いますか。「障がい者」という名前は知っているけれど、詳しくはよく分からない人もいると思います。まず、障がいとは田が見えない、喋れない、歩けないなどといった病気だけではなく、暮らしていくための仕事などの活動や参加が思うようにできないことを障がいと言います。私は今まで、障がいについてよく知りませんでした。ただ、障がいを持つ人が、この世の中にいる、というぐらいでした。

ですが、だんだんと日常を過ごすうちに、障がいを持つ人と関わるようになってきました。街中やお店、公園や学校の中になど、意外と近くにいる存在でした。そこで私は、障がいを持っている困っている人がいたら、どんなふうに声をかけてあげるのがいいだろう。そう思って、私は、本やインターネット、テレビなどで障がいについて調べました。私の身の周りにいる人で一番多かった人が自閉症の方だったのではないかと感じました。私はこの言葉から、その人の障がい

で、自閉症を中心に障がいについて調べました。ずっと前から、自閉症の人はいつも何を考えているのだろう。と考えていました。「独特の話し方の理由はなぜ?」「すぐどこかに行ってしまうのはなぜ?」「何度も注意しても分からなくなつてしまるのはなぜ?」たくさん調べてたくさん考えました。調べてみると、自閉症の症状もその人によって違うことが分かりました。「じゃあどう接すればいいのかな。」そう思っていた時、本からこんな言葉を見つけました。『自閉症は障がいの一つだけど、症状は人それぞれ違う。つまり十人十色と考えればいい。一周回ってその人はその人ということ。』私はこの言葉がすごく大切な言葉だと感じました。この言葉は自閉症の人だけではなく、障がいをもつていてる人に対しても、その人が持っている障がいをその人の個性だと思い、その人のその人らしさを受け入れることにもつながつてくるんじゃないかなと感じました。私はこの言葉から、その人の障がい

を理解して、その人の個性を認める」ことが一番大切なことなんだなと自分で分かりました。

たまに、障がいをもつている人に対して、「気もち悪い」「こんなこともできないの?」などと、その人が傷ついてしまったような言葉を聞きます。私は、人なので、だれでも苦手なことはあると思います。それが、その人にとつて苦手なことであるだけであって、その人にも得意なことが必ずあると思います。大切なことは、その人の苦手なことを理解してわらうのではなく、同じ地球で生きている人として、人間として助け合うことだと思います。どうして、障がい者をいじめてしまふ人がいるのか。それはきっとこんな考えができる人がいるからだと私は思います。理解せず、いじめをすることで、その人はとても傷つき、いやな思いをすることになります。もし、平気そうにふるまつっていても、その人は平気ではないです。いやな気持ちになつています。もしも、あなたの周りに障がい者の子がいても、からかはったりせず、寄りそな気持ちで声をかけてあげてください。しっかりと理解して声をかけることで、その子のためになり、助けになるかもしれません。みんなが障がい者について理解して、「障がい者だから」といっていじめることのない世界を私は望みます。

弟たちが教えてくれたこと

郡山市立富田中学校 一年 伊藤 瑞葵

私には弟が一人います。一人とも自閉スペクトラム症という障害を持つていて、毎日ほんの少し違う世界で過ごしています。でも、そんな弟たちと一緒にいる時間は私にとってかけがえのない経験です。

長男の弟は、三女の妹と一緒にロブロックスやゲームなどを楽しんでいます。ゲームをやっている中でグラグラ笑い合っていたり、動画をみながら一人で楽しそうにしている姿を見ると私まで少し笑顔になれるし、互いがちゃんと相手の気持ち理解しているんだなと感じられます。

次男の弟は、動画を見て、大きな声でセリフを真似したり、歌を歌つたりしてとても元気に毎日楽しそうに過ごしていました。でも、最初といふか、今でもまだ少しあるけどいきなり大きな声を出されるときにイライラする事がよくあります。次第に「自分の気持ちを表現していいのかな」と少しずつ理解できるようになりました。まだ多少はイライラしてしまいますが、私は弟がはしゃいでいる姿を見るとやっぱり自然

に笑顔になるし、どうすればもっと楽しく過ごせるか日常的に考えるようになりました。

弟たちと過ごす中で、私は人の気持ちを思いやる大切さを学びました。言葉でうまく伝えられないときでも、そばにいて支えることや一緒に楽しむことが一番の思いやりになるのだろうと思いました。また、弟たちから元気や笑顔をもらうことで、私自身も優しくなれる気がしました。私がいることで少しでも安心してもらえるようにがんばりたいです。

弟たちを見ていると、思いやりといふものは特別な行動や大きな言葉だけで、示すものではないと感じます。小さな気遣いや、相手のことを考えて行動するなど、そして相手が何を感じているかに耳を向けることが本当の思いやりだと思いました。

私は、思いやりは相手だけでなく自分の心も豊かにするものだと感じました。弟たちと関わる中で、相手の気持ちに少し敏感になり困っている人や悩んでいる人に気付けるよう

になつたと思います。そして、思やりの『気持ちは学校や友達との関わりでも生かせると考えています。友達が困ついたら、すぐに助けたり、話を聞いてあげることも思いやりの一つだと思います。

さりに、思いやりは自分一人だけで完結するものではなく、周りの人にも広がっていくものだと感じます。誰かが優しくしてくれると、それを見た人や、優しくされた人もその人と同じように優しくなると思えます。弟たちが元氣いっぱいに笑っている姿を見ると私も自然と笑顔になり、家族のみんなも自然と明るい気持ちになります。

このように、思いやりは「人から人へ連鎖していくもの」だと気付きました。だから私は、まず自分から思いやりをもつて行動することで、周りに少しずつ広がっていく信じています。

私はこれからも弟たちの気持ちを理解し、助け合いながら生活していきたいです。そして、家族だけでなく、周りの友達や困っている人たちにも、思いやりの『気持ちを大切にしていきたい』と思います。弟たちが教えてくれた「小さな積み重ね」が、これから私の生活や行動の基礎になつていくと感じます。思いやりは、誰かのためにするものもあり、自分自身を成長させるためにあることでもあると思います。私はその気持ちを忘れずに、これからも人と関わっていきたいで

す。

弟が教えてくれる幸せ

郡山市立喜久田中学校 三年 遠藤 優杏

私の一日は、「おはよう」と弟に声をかけることから始まります。弟は発達障害があり周りの子と比べて言葉を話すのが少しづつくりです。でも、その分、一つひとつの言葉に想いがこもっていて、私の心にまっすぐ届いてきます。うまく言葉にできなくても、田を見て、笑って、ジェスチャーで一生懸命伝えてくれる。その姿を見るたびに、「この子は本当に強くて、優しい心を持っているんだな」と感じます。

弟は、毎日「ひー」しています。怒っていたり、悲しいことがあっても、少し経つとまた笑顔になって、私のそばに来てくれます。そして、弟は毎日「だいすき」と私に伝えてくれます。その言葉は、私の心をそっと包み込んでくれる魔法のようです。どんなに疲れていても、その声を聴くだけで心がふわっと軽くなります。言葉は少なくとも、心はたくさん伝わってきます。私は弟を通して、本当の優しさというものを教えてもらっています。

この前、弟と一緒に公園に行つた時のことです。弟はすべ

の姉で本当に良かったよ」と。

り台が大好きで、何度も何度も「みててね」と言いながらすべっていました。私はずっと拍手をしながら見ていたのですが、ある時、弟がつまずいて転んでしまいました。私はすぐにかけ寄って「大丈夫?」と聞くと、涙をこらえながら立ち上がって、「だいじょうぶ」と笑ったのです。その笑顔に、私は胸がぎゅっとなりました。

その小さな背中が、涙をこらえて笑う姿が、私にはとても大きく見えました。きっと、弟なりに「強くなりたい」と思っているんだと思います。私は、そんな弟のそばで、これからもずっと見守っていきたいと思いました。そして、弟の頑張る姿を誰よりも近くで応援してみたい。そう思いました。

弟は、誰よりも純粹で、まっすぐで、そして愛にあふれた存在です。うまく伝えられない気持ちも、時間をかけて必ず届けてくれるそんな弟と毎日過ごせる私は本当に幸せ者だと思います。弟が生まられてきたこと、弟と姉弟としてめぐりあえたこと。それは、私の人生の中で一番のプレゼントです。

私は、弟の姉でいられることが、心からうれしいです。弟がいるから、私は強くなれる。優しくなれる。感謝する気持ちを忘れずにいられる。これからも弟と一緒に笑って、成長して、たくさんの思い出をつくりたいです。そして、どんな時でも伝え続けたい。「私もあなたが大好き、あなた

吃音と私

郡山市立喜久田中学校 三年 佐藤 結真

みなさんは吃音という障害を知っていますか。吃音は、話すときに言葉がどもったり、同じ言葉を繰り返したり、引き伸ばしたり、詰まつたりする発話障害です。これらを理由に、差別や偏見の対象になることがあります。

例えば、いじめられることがあります。話し方がおかしい、話し方が移りそう、などの理由だけでいじめられ、不登校になる人も多いです。また、吃音により自分の話しか方に自信をなくし、学校生活での発言や発表を避けるようになることもあります。これらによって、自己肯定感が低下することもあると思います。

私も吃音を持っているのですが、一時期発表や発言が嫌だった時がありました。人の目の前で、言葉が詰まつたらどうしようと不安に潰されそうなることもありました。また、私は中学校に入学するまでは同級生に吃音のことを伝えていたのですが、中学生になつてから吃音のことをカミング

アウトしました。カミングアウトするまでは、何かを発言、発表せざるを得ない時に、周囲からの不思議そうに私を見る眼差しが嫌でした。けれどもカミングアウトをすると、学校生活がとても楽になりました。今では、人前で話す機会が多い委員会の委員長になることもできました。また、小学生の時は学校放送を絶対にしないと思っていましたが、中学校に入ると自分に自信が付き、学校放送もできるようになりました。

当事者として、吃音を理解している人、また知っている人がとても少ないとthoughtいました。私は、もっと社会に吃音の辛さを紹介してほしいと思います。本当に言いたいことがある時に詰まつてしまい言えないもどかしさを紹介してほしいのです。吃音には、難発、伸発、連発の三種類があるという表面的な情報だけでなく、吃音が出た時にどれ程緊張したり、焦つたり、不安になるかということを知つてもう一つこそ

私が考える理解です。

私の、修学旅行の時にカードゲームで遊んだ時の話です。そのカードというのは、一人ずつモンスターが書いてあるカードを引き、そのモンスターに名前を付け、またそのモンスターを引いたら、そのモンスターの名前を誰よりも早く言つという遊び方のカードゲームです。私は、その時にモンスターの名前は覚えているのに、言葉が詰まって言えなくて負けたという悔しい出来事がありました。このカードゲームは勝負ですから、さすがに言葉が出るまで待つてもらひうなんてことはしませんでした。

吃音はまだあまり知りていません。また、治療法という治療法はありません。ですが、吃音のことを社会全体に知つてもらえば、吃音を持つている人は今よりもっと生活しやすくなると思っています。吃音のことをもっと理解してもらえば、今よりもっといい社会になると信じています。私は、当事者として吃音で詰まってしまっても、自分の伝えたいことを伝えるようにすることが大切だと思いました。また、このときには、本人の努力だけでなく、周囲の理解も大切だと思います。

「自分と違う」を認められる人になる

郡山市立第二中学校 一年 井上 うひの

私は今、自分の個性を理解し、受けとめて生活しています。例えば、周りの人とは違うことをしたいという考え方の個性です。このような考え方にも、一人一人個性が表れます。そして、私は、自分だけではなく周りの人の個性も否定などはないように気をつけて生活しています。しかし、この世界には私と同じ考え方の人ばかりではありません。他の人の個性を認められない人もいます。

あなたは、誰に対しても相手を理解しようと心がけていますか。例えば、障害を持った方々を差別的な目で見てしまうことが一度でもありませんでしたか。それ違うだけでいつも避けてしまったり、あの人は嫌だと思つてしまったりすることなどです。私は昔、そのような態度をとってしまうことがありました。つまり、障害者の方々の個性を受け止めていかつたということです。

私のその考えが変わったのは障害を持った方の話を聞い

たときです。その人は「このようなことを言っていました。「この障害でさえも私の個性だから、これからも大切にしていきたい」この言葉を聞き、私は心を打たれました。その人は音楽が大好きで視覚障害者であっても、とても上手にピアノを演奏していました。その方は、何度も何度も繰り返し練習をして、ここまで上手になつたのだと思います。周りと違う個性があつてもひたすら自分の好きなことに夢中で取り組んでいたその姿を見て、私は心を打たれました。そして、私を含め、人間はひとつの一面对を見て性格を判断してしまうことが多いですが、そつではなくその人の違う一面も見つけてみることで、よりお互いを理解し合い、相手も自分も快適に過ごすことができるような環境を作れると思いました。

私は、このことがあってから、私の周りで障害者を手助けしている人や建物はないのか調べることにしました。私の家の近くに「障害者福祉センター」という体育館があるのでそ

りたいと強く思いました。

この取り組みについて調べてみました。すると、障害者福祉センターでは次のような取り組みを行つてゐることがわかつりました。「障害をお持ちの方々の自立と社会参加の促進及び身体機能の維持・向上を図るとともに、障がいに対する理解と関心を広めることを目的としている。」取り組みは、「障害をお持ちの方の相談、教養・文化活動及びレクリエーションの支援や機能訓練等講座の開催、障害者福祉に関するボランティアの育成」だそうです。私は、自分の身近に障害者の手助けをしてくれている人たちがいたことに気づき、とてもおどろきました。私も少しでも障害者を手助けできるよう、これから小さな心がけをしていきたいと思います。例えば、点字ブロックの上はふさがないようにしたり、前から車椅子に人が来たら、端によつて邪魔にならないように気をつけたりすることを心がけていきたいです。

私はこのような経験から、自分の個性も、障害者の方々一人一人の個性も理解し、受け止めて、誰もが過ごしやすい環境をつくるるようにしたいと思いました。そのために、偏見だけで人を判断するという考えは捨てて、人それぞれの持つている特徴をたくさん見つけていきたいと思います。そして、周りの人達のいつも見ている一面とは違う一面、良い一面や悪い一面などをたくさん見つけたいと思いました。このようなことから、私は「自分と違う」を認められるような人にな

一つの言葉で思ひやりのあふれるまちへ

郡山市立第五中学校 三年 千葉 優奈

八年前、私は、トランポリンの着地に失敗して、左足首をはく離骨折してしまいました。そのせいで、今も一年に一回以上じん帯を損傷してしまい、松葉杖での生活をおくることになっています。成長して体が大きくなるにつれて、反対側の足や腕などの負担に加え、手伝ってくれる家族の負担も大きくなってきたため、一年前に車椅子を買ってもらいました。

私はまだ中学生なので、中学校で過ごす時間がほとんどですが、校舎内には段差も多くエレベーターもありません。なので学校では松葉杖での生活になります。一年生の時は周りの友達が「手伝おうか?」と声をかけてくれて、身の回りのことを手助けしてくれました。ところが三年生になり、最近は「何か手伝えることがある?」と声をかけられるようになりました。同じような声かけだけ

ど、松葉杖での生活が長いからか、できることも増えた私にとってはとても心地良い言葉でした。何気ない一言ですが、押し付けるのではなく相手に寄り添った言葉だと実感しました。私が逆の立場になつたら絶対に使いたいです。

さて、学校以外では車椅子での生活をしていたのですが、松葉杖と比べて体への負担は少ないものの、普段の生活には不便なことが多いと気付かされました。

身近なところでいえば、エレベーターです。階段やエスカレーターと違い、建物の端の方にあつたり、前進で入つたら狭くて後ろ向きでしか出られなかつたりするものもありました。更に、狭くて乗れないとき、先に乗っていた方が降りてくださいたこともあります。

そして、駐車場にある車椅子や体が不自由な方への駐車スペースは、とてもありがたいと感じました。隣の車とのスペースが広くできているので、安心して乗り降りができることが

が分かりました。ただ、駐車スペースが少ない所もあるので、本当に困っている方へ譲り合ひの心を持つて使用してほしいと思いました。

私が車椅子生活で一番大変だと感じたことは、公共交通機関を使った移動でした。県外へ宿泊のため新幹線で移動をした際に感じたのは、荷物問題でした。車椅子なので当然キャリーケースは不可能です。リュックを前に抱えるしか方法はありません。車椅子を押してくれた母も同様にリュックを背負いながらの移動でした。車椅子と大きなリュックの母、急いでいる人へとても迷惑をかけてしまったと、申し訳ない気持ちでいっぱいでした。でも、新幹線はとても快適でした。母が事前に調べてくれて知ったのですが、新幹線には車椅子専用の席があるので。車椅子のまま乗つていられるスペースと、車イスから降りて座席に座つて移動ができる席がありました。私は全く歩けないわけではないので、車椅子対応座席を予約してもらいました。予約する時も、駅員の手助けが必要か確認されたそうです。

私はいつも車椅子での生活をしているわけではありません。また、車椅子に限らず不便な生活を強いられている方が、世の中にはたくさんいます。普段の当たり前が当たり前ではなくなることは、いつ誰にだって訪れると思います。その時になつて気付いて、手を差し伸べてくれる人に感謝するだけ

でなく、手を差し伸べることのできる人が、一人でも多く増えてほしいと思います。

「何か手伝えることはありますか?」この言葉がぱっと出でる思いやりであふれるまちにします。

バリアフリーについて

郡山市立第五中学校 三年 今井 露月

僕は昨年職業体験で障がい者施設の「郡山市花かつみ豊心園」に行きました。職業体験では、脳の体操として行っていおりおしほりを袋の中から出して折りたたんで一つの箱の中に並べる作業と一緒に経験したり、車いすの操作方法を学んだり、一緒に塗り絵をしたりしました。その中でも一番印象に残っていることは車いすを押したことです。なぜならレバーやブレーキの位置、操作の感覚など非常に覚えることが多く、かつ一步間違えればけがをさせてしまうという恐怖があつたからです。以前にもひいおじいさんの家で車いすを押したことがあり一度あつたのですが、一回目でも非常に緊張していました。また、車いすを押している時に「花かつみ豊心園」には段差が少ないと感じました。もしスロープが整備されていない場所やエスカレーターが多い場所で車いすを押す機会があったならば、非常に難しく大変であると思います。車いすを利用する方がたくさんいるよう

な施設内では様々な場所でバリアフリー化が行われていると思います。そこで、続いて私たちの普段住んでいる範囲へ目を向けて考えてていきます。

街中での主要な施設や新しく作られた建物は点字ブロックや手すり、スロープなどが整備されているのをよく見かけますが、古い建物や大きな都市から離れた場所などには未だ整備が足りないと感じます。駅前などの都市部はバリアフリー化の設備が一極集中しているにも関わらず、都市部から離れた場所などを見ると全然設備が整っていない場所が多くあることがよくわかります。だからこそ古い建物を残しながら設置にかかる資金を削減しバリアフリー化を進めていくという課題が残されていると感じます。

また、私は以前小学校低学年程度の児童が点字ブロックに座つたり立つたりなどして、点字ブロックを利用しなければならない方の邪魔になっている場面を見たことがあります。

そこで僕は小学校では確かにバリアフリーなどの身体が不自由な人のための整備について詳しく学ぶことがほぼ無かつたということを思い出しました。自分で興味があつて調べたり、両親から教えられる子供は知ることができます、設備について知る機会が無い子供がもしいたなら、それらについて詳しく知らないまま成長することも考えられるので、学校が小学校低学年のうちから簡単な言葉で分かりやすく説明をする必要があると考えます。道徳や社会などの授業で取り扱ったり、市で作成したポスターなどを各学校に配布し教室に掲示してもらうなどの取り組みを取ることが大切だと思います。

最後に障がい者支援施設で働いている職員の方々のためにつきることを考えていきます。私が職業体験で施設に行きましたことは、働いていた職員はとても忙しいにも関わらずずっと笑顔を見せていました。障がい者支援施設での仕事量は非常に多くとても忙しいため、もし自分が働いていたら障がいの方々に険しい顔を見せてしまうかもしれません。そんな忙しい職員の為にマッサージチェアを設置したり、人々がリラックスして快適に過ごす事のできる環境を作ったり、職員が安心して悩み事の相談ができるように力ウォンセラーに定期的に来てもらうなどの対応を市町などにしてもう一つが非常に大事だと思います。

バリアフリーの設備を増やしていく、障がい者施設の人々やその職員、どちらもリラックスできる環境づくりが大切だと思いました。この作文を書くことによつて再びこのようないことを学べたので、これから的生活に活かしていきたいです。

誰もが輝けるまちを目指して

郡山市立第五中学校 三年 木幡 陽斗

今年の夏、僕はテレビで高校野球を見ていて、ある選手の姿に心を打たれました。県立岐阜商業高校の横山君です。彼は左手の指が生まれつき欠損しているにもかかわらず、チームの中心選手として大活躍していました。バッドを握る姿、仲間と声を掛け合う姿、そして全力でプレーする姿は、僕の目には誰よりも輝いて見えました。

僕はそのとき、「障害があるって、できないことがあるってことじゃないんだ」と感じました。むしろ、横山君は自分の体と向き合い、工夫し、努力を重ねて、できることを最大限に伸ばしてきたのだと思います。その姿は、僕たち健常者が見習うべきものだと感じました。

学校では、「共生社会」について学ぶ機会があります。でも、正直に云つと、僕はそれまで「障がい者＝助けるべき人」というイメージを持っていました。でも横山君のプレーを見

て、その考えが変わりました。障がいがある人も、夢を持ち、努力し、挑戦し、そして輝ける存在なのだと気づいたのです。

僕の住む街にも、車いすの方や、視覚障がいのある方が生息しています。駅にはエレベーターがあり、点字ブロックもあります。でも、それだけで「誰もが暮らしやすい街」と言えるのでしょうか。例えば、点字ブロックの上に自転車が置かれていたり、エレベーターが遠くて使いづらかつたりすることがあります。見た目だけの「バリアフリー」ではなく、心のバリアをなくすことが本当に大切なのだと思います。

僕は、障がいのある人が「遠慮せずに外に出られるまち」をつくりたいです。それは、設備だけでなく、周りの人の理解や思いやりが必要です。例えば、困っている人に声をかける勇気。違いを受け入れる心。そうしたことが積み重なって、誰もが安心して暮らせるまちになるのだと思います。

横山君のように、障がいがあつても夢を追いかける人がいます。そんな人たちが「自分らしく生きられる社会」をつく

るために、僕たち一人ひとりができるとは何かを考えたいです。僕はまず、身近なところから始めます。学校で友達が困っていたら声をかける。道で困っている人がいたら手を差し伸べる。そうした小さな行動が、やがて大きな変化につながると信じています。

障がいがある人も、ない人も、みんなが同じように夢を持ち、努力し、笑い合えるまち。そんなまちを、僕は作っていきたいです。

僕はこれから、もっと障がいについて知りたいと思います。知ることで、相手の立場に立って考えることができるようになるからです。例えば、視覚障がいのある人がどんな工夫をして日常生活を送っているのか、聴覚障がいのある人などどうやってコミュニケーションを取ればよいのか。そうしたことを学ぶことで、僕自身の視野も広がると思います。

また、学校や地域でも、障がいのある人と自然に関われる場がもつと増えたらいいなと思います。一緒に活動したり、話したりする中で、お互いのことを理解し合えるはずです。違いを知ることは、壁をつくることではなく、橋をかけることだと思います。

僕は、横山君のように夢を追いかける人たちを応援したい。そして、誰もが「自分らしく生きられる社会」を目指して、これからも考え、行動していきたいです。

障がい者について

私はこれまで、障がいのある人と深く関わったことはありませんでした。テレビや本で見ることはあっても、実際に自分の生活の中で会う機会は少なく、「障がい者」という言葉を聞くと、どこか自分とは関係のない遠い存在のように思っていました。しかし、学校での学習や体験を通して、障がいのある人たちについて知るうちに、その考えは大きく変わりました。

ある時、福祉について学ぶ授業で、車いすに乗った人の生活や、耳や目が不自由な人の工夫を紹介するビデオを見ました。そのとき私は、「障がいがあるからできないことが多い」というイメージを持つていた自分が間違っていたことに気づきました。確かに不便なことはあるかもしれません。でも、周りの人や社会の工夫しだいで、みんなと同じように生活したり、楽しんだりすることができます。それなのに、今の社会はまだ十分にそうした工夫がされてないこともある

と知って、少しショックを受けました。

また、実際に障がいのある人と一緒に接する機会もありました。ボランティア体験で、知的障がいのある方と一緒に簡単な作業をしたのです。最初はどう声をかけていいのか分からず、緊張しました。しかし、その方は明るく笑いかけてくれて、私が間違えたときも、「大丈夫だよ」と励ましてくれました。そのやさしさにふれたとき、私は「障がいがあるからといって特別な人なのではなく、同じように心を持つた一人の人なんだ」と強く感じました。むしろ私よりずっと前向きで、学ぶことが多いと感じました。

それと同時に、障がいのある人が生活の中で直面している困難について考えました。たとえば、駅にエレベーターがなければ、車いすの人は一人では電車に乗れません。信号の音がなければ、耳が不自由な人は安全に横断歩道を渡れません。またこのように「障がいそのもの」よりも、「社会の側に準

郡山市立第五中学校 三年 根本 晴空

備不足」が生きづらさを生んでいただと感じました。これは私にとって大きな発見でした。

さらに、私たちの中にある「思い込み」も障がいのある人を苦しめることがあると思いました。「かわいそう」とか「手伝つてあげないと何もできない」といった気持ちは、一見やさしさに見えます。でも、それが相手を一人の人間として見ず、「障がい者」という枠で決めつけてしまうことにつながつてしまふのではないのでしょうか。私自身もそうした思い込みを持っていたことに気づき、反省しました。

私はこれから、「障がいの人」と「障がいのない人」を分けて考えるのではなく、同じ社会で生きる仲間として接し

ていきたいです。そのためには、まず知ろうとする」と、そして相手の立場に立つて考えることが大切だと思います。たとえ小さなことでも、自分ができる行動を重ねることが、誰にとっても暮らしやすい社会につながるのだと思います。

今回の学びを通して、障がいの人に対してもかわいそうでなく、同じ一人の人間として生きていると思いました。そのため誰もが自分らしく生きられる社会になってほしいと思います。

令和七年度「郡山市おもいやり作文コンクール」実施要項

一 目的	障がいに対する関心を高め、障がい者福祉を考える機会として、市内の小・中学校の児童・生徒を対象に障がいに関する作文を公募し、優秀作品集を公表することにより、障がい者に対する理解を深めるとともに、児童・生徒の障がい者に対する意識の高揚を図る。
二 主催	郡山市
三 共催	郡山市教育委員会
四 募集対象 及び部門	市内在住又は市内の学校に在学する小学生四年生から六年生まで及び中学生 (1) 小学生の部 (2) 中学生の部
五 募集作品	(1) 内容 障がいのある人と自分との関わりの中で感じたことや、障がいのある人にとっての暮らしやすいまちや福祉について考えて いること等を表現した作文とするが、主題については、応募者の任意とする。 (2) 様式等 一人一点・四〇〇字詰め原稿用紙（B4判）縦書き四枚以内
六 応募方法	応募者は、応募票（様式1）と作文を各小・中学校に提出する。小・中学校は、応募者名簿（様式2）を作成の上、作文、応募票及び応募者名簿を提出する。
七 応募期限	各学校から障がい福祉課への提出期限 令和七年九月十六日（火）

八 応募先

郡山市 保健福祉部 障がい福祉課

〒九六三一八六〇一 郡山市朝日一丁目一十三番七号

TEL 九二四一一三八一

九 賞

応募者には参加賞を贈呈する。入賞者には記念品を贈呈する。入賞者には賞状を授与する。
各部門とも最優秀賞1点、優秀賞3点程度、佳作5点程度とする。
副賞として、最優秀賞には図書カード一千円分、優秀賞には一千円分を贈呈する。

十 審査

(1) 審査会

審査会の審査員は、四名とし、以下の者で構成する。

ア 郡山市 障がい福祉課長
イ 郡山市 学校教育推進課長より推薦された指導主事等 二名
ウ 福祉関係者 一名

なお、審査会会长は、障がい福祉課長とする。

(2) 審査基準

優秀作品の選考に当たっては、次の基準により行うものとする。
ア 障がい福祉に対する理解を深める趣旨に合致していること。
イ 誰でも分かりやすいこと。
ウ 豊かな表現力であること。
エ テーマによって必要とする基準については、審査員の協議により設けることができるものとする。

十一 その他

(1) 児童・生徒から小・中学校への提出期限は、各学校が定める。

令和七年度 審査員

福島県公立学校退職校長会 伊藤 幸夫 郡山市手をつなぐ親の会 渡部 麻紀子
福島県公立学校退職校長会 大越 吾都臣 郡山市障がい福祉課長 渡辺 恵一郎

作文応募状況

【小学生の部】

4年	5年	6年	計
28	29	26	83

【中学生の部】

1年	2年	3年	計
74	64	79	217

応募総数	300
------	-----



**令和7年度
郡山市おもいやり作文コンクール
優秀作品集**

令和7年12月

■編集／郡山市保健福祉部障がい福祉課
〒963-8601
郡山市朝日一丁目23番7号
電話：024-924-2381
FAX：024-933-2290
<http://www.city.koriyama.fukushima.jp>